

## 神仏習合とは 神も仏も同じ?

風花 小町

春、桜の季節です。福井市を流れる足羽川の土手に、私が日本一だと断言したいくらいの桜並木があります。この桜の花のトンネルの下を大勢の人と一緒にそぞろ歩きした友が、今重い病氣と向き合っています。人はかならず通る道なのだけけれど、こんな時我々は何もできません。本当に最後まで自ら闘い、すべてを自ら引き受けて行かねばなりません。

すぐることのできる信仰を持っている人は強いといいますが、私はというと、これですと言えるような宗教は持っていません。ですからどのような最後の時の迎え方をするものかまったく見当もつきません。

今回我々がとりあげている『今昔物語集』は、主として仏教説話集ですから、厚い信仰心で満たされています。その中で、私が長い間わからないままで過ごしてきた神仏習合について考えてみたいと思います。"No と言えない日本人"のルーツはこのあたりになるのか、それとも別の要因で"No と言えない日本人"だからこそ、神仏習合というような訳も分からないようなものを創りあげたのか...?

### 仏教伝来による抗争と、仏教の定着・開花

日本に仏教が正式に入ってきたのは538年、欽明天皇在位(528 572年?)中の、豪族たちがしのぎを削っている頃のことでした。このおり百済の聖明王は釈迦の金銅仏一体、経典、僧などを献上したといえます。

実際には仏教はこれ以前にすでに渡来人たちによって信奉されていて、継体天皇(507 528在位?)の時代に、中国からの渡来人司馬達等(たつと)の名も知られています。

(仏師：鞍作止利(くらすくりのとり)は達等の孫か?)

聖徳太子(572 622)は馬子らと、中国の唐から新しい政治体制を学び、仏教を中心とした推古天皇朝(593 629在位)をつくりあげていきます。法隆寺が完成したのが607年(推古15年)で、ここに飛鳥文化が花開くのです。

仏教の繁栄は都が平城京に移っても衰えませんでした。聖武天皇(724 749在位)が全国に国分寺や国分尼寺を、平城京に東大寺大仏殿を建立するに至って、伝来仏教の絶頂期を迎えたといえます。

### 出た! 神仏習合、本地垂迹の思想

仏教伝来から2世紀余り、膨大な国の財と国民に労役を課して造られた東大寺をはじめとする寺々の建立は、もはや国民にとってありがたいもの、救いにはならなかったのです。仏教界にも停滞ムードがはびこり、規律も乱れだします。そうしたおり、国の中枢である朝廷のトップで奇妙な事件が起こったのです。

称徳天皇(764 770在位)の時代に道鏡という高僧がでてきます。天皇の寵愛を受け

て太政大臣や法王の位にまで登りつめた人ですが、この僧道鏡が 769 年宇佐八幡宮から神託があったとして、自ら皇位を望んだというのです。

宇佐八幡宮というのは欽明天皇の時代、大分県宇佐市にある山の頂に創立され、応神天皇や神功皇后をまつる全国八幡宮の総本山とされる由緒ある立派な神社なのです。なぜ高僧である道鏡が神社からの神託を理由づけに使ったりしたのでしょうか。

『今昔物語集』にも神仏習合の考え方が現れている箇所がいくつかあります。巻第 11 の 10 話で伝教大師(最澄)が唐に渡る前に宇佐の宮に詣で、航海の安全を祈り、805 年の帰国後にも無事の帰還への御礼に参内しています。そして[仏法をひろめ一切の衆生の病をいやしたい。]と抱負を述べるのですが、その折り八幡大菩薩の御護をいただきたいともいっています。神社に大菩薩? それから最澄は春日大社(奈良)に出むいて法華経を講じたともあります。神道も仏教もなく混然としています。

神仏習合の考えがいつ頃始まったのか特定はできないようなのですが、道鏡のエピソードがあった時にはすでにこの考えが定着していたと思えるのです。

神道とは「日本固有の宗教で、『古事記』『日本書紀』などに見える神代の故事にもとづいて、神を敬い、祖先を尊び、祭祀を行うこと」(日本国語大辞典)とあります。仏教が華やかに表舞台に立っていた時も大切に守られてきたのですね。

そして我らの祖先は、神道・仏教の両方を大切に思うあまり、本地垂迹<sup>注</sup> という考えをあみだし、神道における神と仏教の仏菩薩とを同じものだとしていったのです。苦肉の策だったのです。こうでもしなければ、朝廷のうちで神道派と仏教派に分かれ闘争が続いていったことでしょう。

江戸時代の国学において、記・紀・万葉などの古典が研究され、儒教・仏教渡来以前の我が国固有の生活や精神を明らかにしようとする学問が盛んになります。この折り、神仏習合の不明瞭な点が問われることになり、天皇を中心とする明治新政府になるや初年に禁止されることになるのです。

神道と仏教の歴史的流れを追ってみました。現代の我々はどうでしょうか?

私も大体の日本人がそうであるように、今までの家族の習慣に従って神も仏もない暮らしをしています。まずお正月からして神社に初詣でに出かけ、その帰り近くのお寺にも寄ってお参りし鐘をついて帰ります。子供の成長に合わせて七・五・三のお祝いもしました。親族がなくなれば家の宗派に従ってお寺さんに供養していただきます。私の育った家には仏壇と神棚の両方がありました。その上今度は主人がキリスト教会の日曜礼拝に出かけていたりもします。

こんな風に、信仰とか宗教とかいう面では節操のない訳の分からない生活をしています。でもその時々で私は決していいかげんな気持ちでその場にいるのではないことは確かです。相手を神とか仏とかははっきりと意識しているのではなくて、なにか"大いなるもの"の存在に対して手を合わせている気がします。畏敬の気持ちも懐いています。この大いなる宇宙・自然・神秘の中で生かされているという思いも強くあります。宗派も建物も組織も力もないまったくの個人的な祈りだけれど、それでも十分救ってもらえると信じているのですが...甘いでしょうか?

《注》<sup>ほんじすいじゃくせつ</sup>本地垂迹説について

辞典によると、神は、仏が世の人を救わんとして姿を変えてこの世に仮に現れたものと考えられた。平安時代末期から鎌倉時代にかけてすべての神社に本地仏が定められるほど盛んになり、明治初年の神仏分離まで続いたとのこと。

例えば、天照大神の本地は大日如来だとします。

日葡辞書には、垂迹について「Suixacu スイシャク。すなわちアトヲタルル。

(訳)カミまたはホトケが互いに他に代わってつまり名をかえて現れ、たとへばある場所を護るなど、本来の努めを果たすこと」とある。